

アタカマ砂漠マラソン 2011 ランナー

～荒井 志朗～

インタビューアー 関根 優輔（興和チリ）

2011 年 3 月 14 日、アタカマ砂漠マラソン 2011 に参加した荒井志朗氏がサンティアゴを訪問。3 月上旬に「アタカマ砂漠のレースに日本人が参加する」という情報が会報編集委員会に入り、委員会メンバーは「レースって車かな？」「いやバイクですよ」「自転車？」「砂漠でチャリはないでしょー」などレースに関する無知ぶりをさらけ出していました。なんとこのレース、7 日間で 250km を足で(!)走るという非常に過酷なもの。これを見事完走なさった荒井氏に、お話を伺いました。



1. 砂漠マラソンの中で一番難しいといわれているアタカマ

関根： この度は、アタカマ砂漠マラソン完走おめでとうございます。

荒井： 有難うございます。

関根： 今回は初めての参加だったそうですが、このマラソンを知ったのはいつ頃のことですか？

荒井： 2 年位前に友達に聞いて、あるっていうのは知っていたんです。でも、僕が走り始めたのは 1 年ちょっと前くらい。それまでは仕事も忙しかったし、全く運動してなかったんですけど、走る練習を始めてから普通のマラソンに参加し始めました。でも飽きてしまって、「次はもう砂漠かな」って。

関根： フルマラソンは走り始めて直ぐに完走できたんですか？

荒井： 走り始めて3ヶ月くらいかな。で、タイムも伸び始めてきてたんですけど、マラソンで結構走ってる人が多いしつまらないなあって思って・・・。

関根： 人と違うことをしたくなったということですか？他の人たちとは違うところで走りたいと？

荒井： そうですね。

関根： 荒井さんは、学生時代はどんなスポーツをしていたんですか？

荒井： 僕はアメフト部だったんですけど、選手ではなく、戦略スタッフをやりたいってそっちのほうをやってたんです。だから、運動経験で本当にこの1年ちょっとくらいです。ただ、持久力はあるほうなので、それが向いていたようです。

関根： 実際にアタカマ砂漠のレースに参加しようと思ったのは何時頃からですか？

荒井： そうですねえ、半年くらい前かな。

関根： 半年?! たった半年ですか？

荒井： はい、普通は1年くらい前から計画して練習したりするみたいですけど。

関根： それで、お仕事の傍ら練習をされたんですか？

荒井： そうです。仕事は結構忙しいんですけど、時間を作って週末に練習しています。

今回のレースに限って言うと、アタカマ砂漠は砂漠マラソンの中でも一番難しいって言われているんです。というのも、初日の標高が3300mで高山病が一番の敵。スタートからそんな調子なので一日目からリタイアする人が結構いました。だから、僕も東京で特別なトレーニングで呼吸法を習ったりして、体を慣らしていきました。



関根： レース中の7日間、高山病の症状は出なかったんですか？

荒井： レースの2日前から眠りがすごく浅くて、1時間寝ると起きてしまうような状態で、それがきつかったです。更に東京とチリでは時差や季節の差もありますから。それに、

日中は45度で夜は温度が一桁まで下がるので、気温差がとにかくすごくて、体調管理は本当に大変でした。

関根： レース前、現地ではほんの数日しか体を慣らす時間がなかったわけですよね。その間特に気をつけたことってありますか？

荒井： そうですね、とにかく体を休めるように注意していました。先ほどもお話したように、1時間も寝ると目が覚めてしまうんですけど、それでも動かずとにかく休む。あとは高山病に効くマテ茶を飲んでました。

関根： こちらに着いてから練習はしたんですか？

荒井： チリではしていません。日本でも2週間前くらいからきつい練習は止めました。長距離のレースは、体の中に疲れが残っていると良くないので、敢えて体が走りたくてうずうずするくらいにしておきました。後は準備に時間をかけていました。

関根： 準備の時に気を使ったことってありますか？ 例えば情報収集とか？

荒井： それはもう、経験者の方に話を聞くことです。今回日本からは7人が参加したんですけど、1月に参加者が集まる機会があったので、その時に皆さんの話を聞きました。僕以外は皆さんサハラ砂漠の経験者だったので、経験者ならではの貴重な情報を沢山頂きました。あれがなかったら、今回絶対に完走できていなかったです。後はイメージトレーニングをしっかりとっておきたかったので、Youtubeで過去のレースの様子を繰り返し繰り返し見ていました。でもYoutubeだとかなり短く編集されていたので、当たり前ですけど実際に行ってみて驚きました(笑)。

関根： あれは一部だった・・・と(笑)。

荒井： あと準備の時には、走るときは食物と飲物を含めて12kgくらいのバックパックを背負うんですけど、その食物をどうやって減らすか頭を悩ませました。というのも、大会では一日最低2000kcal分の食べ物を持って行きなさいって言われるんですけど、毎日40km走るためには5000kcalはないと足りないんです。でもそんなに持って行ったら荷物が



20kg を超えてしまう。だから頭を悩ませて、結局僕は一日当たり 2500kcal 分の食料を持っていきました。

関根： 例えばどういう食べ物を持って行くんですか？

荒井： カップラーメン、粉末のコーンスープ、粉末のお汁粉、これが朝と夜。昼にはカロリーメイト、ドライフルーツなんかを用意しました。あとはスポーツドリンクも持って行きましたね。ビーフジャーキーとかも持って行きたかったんですけど、チリは持ち込みが禁止されていると聞いていたので、あきらめました。



関根： 外国の方々はどういったものを持ってきていたんですか？

荒井： イタリア人はチーズ。アメリカ人はビーフ、ジャガイモ、その他の野菜をぐちゃぐちゃにしたような乾燥食品。この乾燥食品は水で戻して食べるんですけど、すごく不味いんです。でもトップ選手はそういうものを我慢して食べていました。あと、日本人ではアルファ米を持ってきている人たちもいました。アルファ米は高カロリーですから。食べ物は日本人が一番美味しいものを食べていたと思います。

関根： 水は途中に給水所があるんですよね？

荒井： そうです、だいたい 10km 毎に水が 1.5ℓ もらえました。ただ、場所によっては区間が長くて、2.5ℓ 持たされるんです。そうすると荷物が重くなって大変でした。

関根： 日本でもそのくらいの荷物を持って練習をしていたんですか？

荒井： はい。最後の方は荷物 10kg を背負って、2 日連続 50km 走ったりしてました。山手線一周が大体 42km なので、一周してからどこかへ行く、という感じで 7、8 時間走っていました。

関根： アタカマでは一日何 km 走っていたんですか？

荒井： 平均は一日 40km なんですけどイレギュラーで、初日が 35km、その後 43km、40km、42km と続きます。そして、最後に 76km のオーバーナイトステージになります。これは夜も休まず 2 日間で 76km 走るのので、最終日の走距離は十数 km になります。これで計 250km です。

関根： レース 3 日目、4 日目辺りは非常につらい時期だと思いますが、「もう無理！」と感じてしまうことってありましたか？

荒井： 僕はそういうことってなかったです。一瞬でも気を抜くと日射病になって倒れてしまうから、とにかく集中して走っていました。ただ、アタカマのレースは本当に過酷なので、どんな選手でも完走する自信が 100%になることがないんです。誰でも体調を万全に整えておかないと、2 日目でリタイアなんてことが十分あり得る。その代わりに、集中するとそれが高揚感に繋がっていて、走っている間はその高揚感に満たされる。かつ景色がどんどん変化して行って楽しいんです。そして、夜は 8 時くらいには寝て、また翌朝 8 時から走る。

今回は 112 人参加して、完走したのは 86 名でした。26 名の選手は途中でリタイアしてしまいました。それくらいタフなんですね。でも、今回参加した日本人選手は全員完走しました。その中に村上さんという 61 歳の女性がいるんですけど、彼女は今回の参加者の中では最高齢だったんです。見事完走しましたが、彼女の意志の強さは考えられないくらいすごくて、本当にいろんな選手から賛嘆されていました。



関根： やっぱり最後は精神力なんですね。

荒井： そうですね。無理だって思ってしまったら、そこで体が動かなくなってしまいますから。

2. 自分の限界にチャレンジする為の1週間

関根： これから先よく聞かれるかもしれないんですけど、このレースで走ってみて、人生観や考え方の変化ってありましたか？

荒井： 人生観ではないんですけど、今回参加にあたって沢山の人たちから応援してもらって、すごくサポートしてもらえたんです。それに対して完走って言う形で応えることができたのがすごく嬉しかったです。人間て、人から力を貰いながら生きているんだなあ、って。

今回参加者の中ですごく仲良くなったある人は、娘さんが難病を抱えていて、彼女を勇気付ける為にレースに参加していたんです。その人が最後の10km区間を一生懸命走っているのを見て、本当に力が湧いてきました。



皆体に鞭打って、其々の思いを伝えている。他の選手がそうやって強い思いを持っているから、僕も頑張れる。そういう経験で、普通はできないなって思いました。あとは、すごくシンプルなんですけど、「足を止めなければゴールは来るんだ」って思いました。最後のオーバーナイトステージになると、足がすごく痛くなってしまいます。でも、歩いてる限り絶対ゴールに近づけるんだって思うと安心して前に進めました。

関根： すごいですねえ。

荒井： あんなチャレンジャーばかりが 112 人も集まることなんて、普通はないですよ。本当は、マラソン大会で 112 人しか集まっていないのだから、少なすぎます。異常です。日本で 200km のレースを開催したら、数千人単位で人が集まってきますから。だけど今回の 250km はすごくタフだから、限られた人たちしか参加しないんです。

関根： それは本当に走ることが好きな方だったり、若しくはさっき仰っていたように何か伝えたいことがある方だったりするんですね。

荒井： 後者の方が多いかもしれません。トップの十数人以外は、とにかく難関にチャレンジするために来ている感じです。そして、その 112 人の参加者とは、とても濃厚な時間を共有することができて、すごく楽しかったです。

関根： 砂漠マラソンはゴビ砂漠、サハラ砂漠でも開催されているんですよね？もうそちらでは走られたんですか？

荒井： いいえ、僕は今回のアタカマが初めてで、次はサハラ砂漠に行こうと思っています。3 つのレースのうち 2 つを完走すると、今度は南極でのレースに参加できるんです。

関根： 其々のレースを完走すると、証明書かメダルみたいなものを貰えるんですか？

荒井： メダルがもらえます。ここに持ってきました。ずっしり重いでしょう（笑）。今まで貰ったメダルの中で、これが一番嬉しかったです。

関根： ホントにずっしり……。すごいですねえ。そして、次はサハラ砂漠ですか。

荒井： はい。砂漠の中ではアタカマが一番きつって皆口をそろえて言うんです。だから僕にとってはサハラ砂漠はもうチャレンジではなくなってしまうんです。今回は純粹にチャレンジの為だけに走りましたが、次はチャリティーとか、何か別の目的のために走りたいと思っています。

関根： チャレンジではなくなっても、やはり走りたいですか？



荒井： はい。だってハマりますよ。今回のレースは 42 時間で完走したんですけど、その間ずっとアドレナリン出っ放しですからね。自分の限界を研ぎ澄まして、その限界にチャレンジする為だけに 1 週間使えるってすごいことだなって。

関根： 荒井さんは、もともと「自分の壁を乗り越えていく」的な行動って好きだったんですか？

荒井： 具体的には思い浮かばないけど、そうなんだと思います。大学の頃も、ラグビー部では勝つことを目標としてひたすら頑張っていましたし。

3. きっかけ、そしてアタカマ砂漠へのチャレンジ

関根： 話は元に戻りますが、一年半前に走り始めたということですが、そのきっかけはなんだったんですか？

荒井： 僕の当時の上司が変わったひとで、「一年間新婚旅行に行ってきます！」って言って会社を辞めてしまったんです。最初は、休職するのかなと思ったら、あっさり辞めてしまった(笑)。で、その人が 2009 年の 9 月に、11 月のホノルルマラソンに参加するから一緒に出ないかって誘ってくれたので、同じく参加することになっていた後輩二人と一緒に練習を始めました。

関根： それで走ってみて、自分にあっていると感じたんですね。

荒井： はい。あの時たまたま先輩が誘ってくれて、後輩二人と一緒に参加してくれていたから今こうして走っているんだなって思います。



関根： その方たちとは今でも一緒に走るんですか？

荒井：　そうですね。去年の10月に一緒に100km マラソンに参加しました。その時は86km 地点で足が曲がらなくなって、残り14km は足を引きずりながら走りました。棄権したら何かの糧を失ってしまうような気がして……。なんていうか表現しづらんですけど、掲げていた目標に達成できなかつたら自分はどうなってしまうんだろうって思ったんです。

関根：　先ほど、足を前に出せばいつかゴールにたどり着くって仰っていましたが、逆に、終わりが無いって感じてしまうことってないですか？

荒井：　うーん、周りの景色が全く変化しないような状況だったらそういう気持ちになることもあるかもしれないです。アタカマでのレースの場合は特に、足元の感覚まで変化するんです。さらさらの砂かと思ったら靴が壊れるような塩の中ですし、更には岩盤を登ったり。だから飽きが来ないというか。そうやって足元が変化する度に、また一つ一つが新しいチャレンジになっていく感じでした。
今考えると、61歳の女性があれを完走したのが本当に信じられないですね。

関根：　男性参加者の中も最高齢61歳の方がいたと伺っていますが、その方も完走なさったんですか？

荒井：　多分したと思います。彼はドイツの方なんですけど、過去に235回のフルマラソンを完走しているんです。そのうち3時間を切ったのが20数回。
彼が走り始めたのは30歳の時で、それまでは体重は重くて、タバコも吸っていたそうです。でもそれから30年間、今まで走り続けてきたそうです。彼の次の目標は160km ノンストップ走か24時間ノンストップ走か、と言っていました。
ちなみに彼は、定年退職してから余生を走ることに注ぎたいということで、今は砂漠レースのドイツ事務局みたいな役目をしているそうです。



関根： 日本にも事務局ってあるんですか？

荒井： 事務局というのはなくて、近藤さんという女性、この方も時々レースに参加するんですけど、その方がボランティアで窓口をしてくださっています。レース自体のヘッドクォーターは香港にあって、そこにはマネージングディレクターがいるみたいです。

関根： 最終的には南極でのレースも走りたいと考えていらっしゃいますか？

荒井： そうですね。南極はアタカマ程の難度ではないので新たなチャレンジでは無くなってしまおうんですけど、環境問題もあって、将来的にレース区域が立ち入り禁止になる可能性があるらしいんです。だから、可能なうちに出ておきたいなと思います。南極レースの場合、普通に旅行に行くのと同じくらいの値段でレースに参加できるんですよ。このレースは「ラスト・デザート(最後の砂漠)」って言われているんです。これはどちらかというとも2つの砂漠レースを完走した人へのご褒美みたいな感覚だと僕は思っています。

関根： 今回のレースも含め、皆さん自費でレースの準備をなさるんですか？

荒井： メーカーの方から備品等を提供して頂いたりして、スポンサーがついている方もいらっしゃいます。僕の場合は、今回そういうことをしている時間的余裕がなかったのでも、自費で準備をしましたけど。

関根： ということは、旅行に行くのと同程度とはいえ、参加するにはかなりの出費がありますよね？それだけお金をかける価値のあるレースだってことなんでしょうね。

荒井： そう、本当にそれだけの価値はあります。
参加費ってどのくらいだと思います？

関根： うーん、全く想像がつかないです……。

荒井： 普通のフルマラソンは参加費が3千~5千円位。東京マラソンの特別枠が10万円。トライアスロンの大会だと3万~4万円。で、南極レースは100万円くらいするんです。その他の砂漠レースは30万円くらい。その他に日本からの往復航空券が必要になります。僕は、今回のアタカマレースの場合はマイルで航空券をとりましたが、そうでなければ最低50万円の出費です。だから、かなりの覚悟がないと参加できないですよ。

関根： 本当ですね。それだけお金がかかると、旅行のつもりで、なんてわけには行かないですねえ。

荒井： ただ、テント地とかすごく景色が良い場所に設置してくれるんです。通常だったら立ち入り禁止区域だけど、主催者側でお金を払って特別に使用許可を得ているらしいです。だから、観光としてもとても良い場所でした。

今回のレースは日本で 90 分の特別番組として放映される予定なので、機会があれば是非見て下さい。

関根： それは是非、見たいですね。

ところで、今回の大会は何回目の開催だったんですか？

荒井： アタカマのレースは 6 回目か 7 回目だったと思います。以前は 8 月に開催していたんですけど、その頃は今よりももっと過酷だったらしくて、朝起きるとペットボトルの水が凍っていて、その水を溶かすことから朝が始まる状態だったそうです。

その頃の経験者は、サハラ砂漠でのレースのことを「ピクニック」って呼んでいたくらいで、本当に天と地ほどの差があったみたいです。

関根： 今回のアタカマの場合、テント地はかなり設備がきちんとしていて、ゆっくり休める環境だったんですか？

荒井： いえ、テント地は指揮テントがあるだけです。全員が 8 人用テントに別れて休むんですけど、テントの地面はでこぼこで、時々はそれこそクレーターみたいな穴が開いていて「本当にここで寝られるのか??？」っていう感じでした。地面があまりにも硬いので、下に敷くパッドを自分で持っていきました。



関根： それは、レース中ずっとご自身で持って走らないといけないんですよね？

荒井： はい。日本人の方で、重いからってパッドを持っていかなかった方がいたんですけど、あまりにも地面が硬いので、食料を下に敷いて寝ていました。

関根： うわー、それは休めないですねえ。

食料はレースが進むにつれて減っていきますけど、衣類なんかはそのままご自身で運ばないといけないんですよね？

荒井： そうですね。ただ、衣類とかはどンドンだめになっていきました。今回持っていった靴下は、全部穴が開いてしまいました。

関根： それじゃあ靴も余分に持っていくんですか？

荒井： いや、そうするとまた荷物が増えてしまうので、靴は持って行きませんでした。ただ、途中で肉刺ができたりして包帯を巻くことがあるので、ワンサイズかツーサイズ大きめの靴を履いていきました。他の砂漠レースだと、時々クロックスで走る人がいるんですけど、アタカマの岩盤をあの靴で走るのは不可能なので、さすがに今回はいませんでした。でも、実はクロックスは結構走りやすいみたいです。

関根： 今日肉刺が痛いですか？

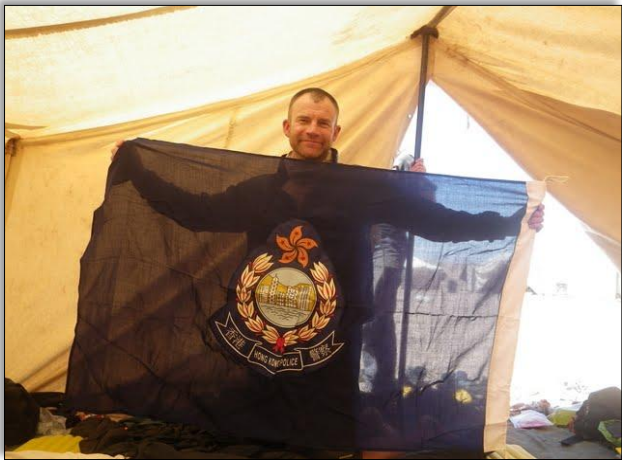
荒井： 肉刺は幸いあまりひどくなかったので、痛くないです。でも、筋肉痛がひどくて……。それでも辛かったかって聞かれると、全くそんなことはなくて、とにかく楽しかったです。面白い人が沢山いましたし。

4. 素晴らしい人々との出会い

荒井： 今回優勝した人は、シンガポール在住のデンマーク人で、今回2度目の優勝だそうです。テントが一緒だった人は夫婦で参加していたんですが、この夫婦、新婚旅行がゴビ砂漠のレースで、今回は結婚一周年記念としてアタカマに参加していました。途中でちょっと険悪になったりしながら(笑)。砂漠のレースは自分自身のペースで走ることができて、他人にペースが乱されることがないのがいい所なんですけど、二人で走るとやっぱり相手にペースを合わせないといけなくなるんでしょうね。

「大変そうだなあ」と思いながら見ていました。あと、マレーシア人のお医者さんが片言の日本語で「イタイ、イタイ」って言いながら笑って走っていたり。

本当に楽しかったです。



関根： 今回は各国から 112 人の方が参加したんですよね？その中で、絶対に忘れられない出会ってありましたか？

荒井： やっぱり、はじめにも触れましたけど、娘さんが難病を抱えている方かな。。

レバノンから来ていた、アリさんて言うんです。確か彼は 48 歳、娘さんは 10 歳だったと思います。

彼は第一ステージで高山病にかかってしまって、実はリタイア寸前だったんです。もともと彼は早くて、その時僕は彼の後ろから追いついて声をかけました。高山病で頭痛がひどくてリタイアするかもしれないということなので、たまたま持っていた酸素タブレットをあげたんです。僕はそのまま先に行ってしまったんですけど、そのタブレットが効いて、彼もその日のレースを続行できたみたいです。それが一日目で、その後は毎日顔を見れば声を掛け合って、5 日目は一緒にゴールしました。

関根： 誰かがリタイアする、その場面に居合わせたことはありましたか？ご本人にとっては壮絶な瞬間だと思うのですが。

荒井： 僕は居合わせたことはありませんでしたが、ドイツ人のお父さんと娘さんが一緒に参加していて、お父さんがリタイアしてしまった日には娘さんがすごく泣いていました。結局お父さんの方はその後もボランティアとして残って、5 日目から再び娘さんと一緒に走っていました。

関根： そういう時のスタッフの対応はどういう感じですか？

荒井： 皆さんプロフェッショナルです。以前に亡くなった参加者もいるので、10km 毎のチェックポイント間で体調が悪そうな場合にはリタイア勧告しています。皆精神力が強いので、体調が悪くて何も食べていない状況でも走って、タフが気をつけないと無理をしすぎてしまうんです。

後は、コースから外れて迷子になってしまう人もいます。コースには 20m くらいの間隔でピンクのフラッグが立っているんですけど、このフラッグが時々ありえない方向に行くんです。それで迷子になる人が時々いて、以前はオーバーナイトステージで行方不明になった人が、翌日違う町の病院で見つかったこともあったそうです。

夜はフラッグの他に反射板がついていて、それを頼りに走ります。僕はオーバーナイトステージの日、日没と一緒にゴールしてしたので経験しなかったんですけど、夜走った人たちは皆星空がすごく綺麗だったって言っていました。

5. 仕事も趣味も全力投球 どんどん成長し続けたい

関根： トップ選手は、走ることで生計を立てている方々だと思うんですけど、荒井さんもそれを目指す気持ちはありますか？

荒井： そういう風には考えたことはないです。趣味という領域でいろいろなチャレンジをして、更に仕事もきちんとして、って言う形で両立できるのが一番僕自身にはあっていると思います。それを見て、自分もそう



りたいって思ってくれている後輩もいるので、今後も今の生活スタイルを維持したいです。まあ、生計を立てないとさすがにレースにも出られないですしね(笑)。

関根： 先ほど「足を前に出せば絶対ゴールにたどり着けるんだ」って仰っていましたが、今回走ってみて、その他に普段の生活にリンクできることって何かありましたか？

荒井： 仕事と趣味に共通して言えるのは、目標を作ってそれを公表するということです。

関根： 「有言実行」ですね。

荒井： はい。「仕事でこれをやり遂げる」若しくは「次はマラソンで・・・をやり遂げる」っていう風に周りの人に公表するんです。個人的に、カッコいい事を言っておいてやらない人は好きじゃない。反対に、自分にとってできて当たり前のことをやると言っても意味がない。だから、できないかもしれないけどチャレンジしたいって言う目標を掲げて宣言するんです。そうすることで仕事でも趣味でも成長のスピードが速まると思うので。

僕は運動を始めて1ヶ月でハーフマラソン、3ヶ月でフルマラソン、その2ヵ月後にはトライアスロンを完走しているんです。そうやってチャレンジを続けながら1年半くらいで今回のアタカマ砂漠で250kmもやり遂げました。それと同じように、仕事の方でも目標を掲げてそれを明言しながらやってきています。

「いつかやる」なんて、多分やらないってことなんだろうと思ってしまうんです。

関根： じゃあ、今回アタカマのレースに参加することも事前に周囲の人たちに知らせていたんですか？

荒井： はい、フルマラソンを走る前から「2011年のアタカマ砂漠レースに参加する」って知らせていました。まあ、会社の休みを取らないといけないのであらかじめ言っておいたほうが良いかなって言うのもありましたけど(笑)。

だから、もう既に10月のサハラ砂漠レースについても明言済みですし、2012年12月には南極レースに参加することも皆知っています。ちなみに2013年は、今のところはキリマンジャロに登ることになっています。

関根： その先にも何か具体的な目標はあるんですか？

荒井： その先はまだ迷っているんですけど、Ultra-Trail du Mont-Blancって言うレースがフランスであるので、それに参加したいなあと。あと、直近で言うと、今年6月にアイアンマン・レースっていうトライアスロンに参加します。これはすごく距離が長くて、スイム4km、バイク180km、最後はフルマラソンというレースで、時間も15時間くらいかかります。

今年は僕にとってビックイベントが沢山ある年なんです。まず今回のアタカマ、そして6月のトライアスロン、最後に10月のサハラ砂漠。

関根： 休みなしですね。

荒井： そうですね。でもこれくらいじゃないと、自分が動き出さない気がしてしまって。仕事も同じで、いかに短時間で成果を挙げるかっていうタイプの業務なので、私生活でもこれくらい緊張感を保っていたほうがやり易いんです。

だから走り始めて、生活を今の形に変えてからは、毎日がすごく充実してきました。

関根： その充実感はこちらにもよく伝わってきます。とても刺激になりました。

ところで、今回のレースの後日本のご家族や友人とは連絡を取られましたか？

荒井： はい。今日本は地震で大変なので、メールやフェイスブックを中心にですけど。

関根： 地震のニュースはどうやって知りました？

荒井： 丁度オーバーナイトステージが終わった時に、主催者から日本で地震があったと聞きました。それですぐにパソコンを立ち上げて、日本語が読めないパソコンだったので、海外のサイトをチェックしました。

関根： 荒井さんのご家族、友人はご無事でしたか？

荒井： 実家は埼玉ですけど、大丈夫だったみたいです。

関根： チリにはいつまで滞在の予定ですか？

荒井： 3月15日までの予定です。その後は、旅行でアルゼンチンに行くことになってい
ます。もともとレースの後すぐに日本に帰るのはちょっときついと思っていたので、ア
ルゼンチン在住のスペイン人を紹介してもらって、その人のところに遊びに行くこと
にしていたんです。

関根： え、スペイン人ですか？ ということはスペイン語はなせるんですか？

荒井： いえいえ、スペイン語は全然ダメです。英語が話せたら何とかなるかなって(笑)。

関根： ははは、是非楽しんできてください。

今後も目標に向かって頑張ってください。応援しています。

今日は本当に有難うございました。

荒井： 有難うございました。